

## 生涯学習社会における学校教育

木 原 孝 博

(岡山大学)

### 1. 生涯学習社会と自己教育力

現在のわが国の学校教育は、生涯学習社会に適合した学校教育となっているかどうか。生涯学習社会における学校教育のあり方を検討し、その視点から現在のわが国の学校教育の現実姿態を診断するのが、この論文の目的である。

生涯学習社会については多様な解釈があこなわれているが、生涯を通して学習していかなければならない社会で、そのためにいつでも誰でもどこでも学習の機会が与えられている社会だと言えるであろう。

現在のわが国社会をなぜ、このように生涯学習社会として把握しなければならないのか。わが国社会の捉え方としては、その外にもさまざまな捉え方がある。わが国社会は、産業部面だけでなく私生活の方面でも情報化が進展してきている。この部面に着目して捉えれば、わが国社会は情報化社会だと言うことができるであろう。

同じようにわが国では、国際化や高令化が進展している。したがって国際化社会、高令化社会として捉えることも可能である。現実に情報化社会、国際化社会、高令化社会として捉え、それぞれの捉え方に見合った教育的

対応が試みられてもいる。

それがなぜここでは生涯学習社会なのか。なぜわが国の社会を生涯学習社会として捉え、その対応を考えいかなければならないのか。

人々はそのぞれの立場や視点によって、情報化社会、国際化社会、高令化社会と捉える。立場や視点の違いによって同じ社会が異って見えてくるのである。あるいは同じ社会の違った側面が見えてくると言って良いのかも知れない。だが立場や視点によって異った側面が見えてくると言ってもそこにはやはり共通の捉え方が見られる。それはわが国の社会が急激に変化しつつあるという認識である。わが国の社会が急激に変化しつつあると言うことは、今までとは全く異った新しい問題が生起しているということであり、人々は、新しい問題への対応を迫られているということである。そしてもし解決できなければ、個人として生きていけないばかりでなく、人類としても生存していけなくなる。そこでどうしても新しく問題に対する解決能力の育成が緊急の課題となってくるのである。新しい問題に対する解決能力はどのようにして身につけていけばよいのか。それは学習による以外にはない。こうして変動社会は、常に生起する新しい問題に対処していくなければならない社会であり、新しい問題に対処していくためには、常に学習し、問題解決能力を高めていかなければならない社会なのである。学校教育で学習した知識や技能・能力だけで、学校卒業後の問題を乗り切れるような、そんな甘い社会ではない。学校からはなれても生涯にわたって常に学習し、自己を高めていく必要のある社会である。こうして変動社会は生涯学習社会とならざるを得ないのである。

現代の変動社会が同時に生涯学習社会であるとすれば、生涯学習社会の中での学校教育のあり方が問題となる。生涯にわたる学習の中で、学校教育は、どのような役割を果たせばよいのかという問題である。

言いかえれば、生涯学習体系の中に、学校教育を位置づけることである。生涯学習体系の一環としての学校教育は、どうあらねばならないか。生涯学習体系における学校教育の役割いかにという問題である。

生涯学習社会における学校教育の役割は、学校を卒業してからも生涯にわたっての学習を可能とする基礎・基本的能力を育成することである。学校卒業後の生活において必要とする知識・技能・生活態度を学校教育の期間中に全部教えてしまうことは、とてもではないが不可能なことであるし、またどんな知識・技能・生活態度を、これから社会が必要とするかを予測することも、できないことである。

このような状況の中で学校教育のできることは、そしてまたやらなければならぬことは、学校卒業後生涯にわたって学習し続ける能力を育成することである。学習し続ける能力を育成しておけば、新しい問題に直面し問題解決を迫られる時、平素の学習によってその問題に対応できるだけの力を身につけているであろう。あるいはその時点で対応の仕方を見出すことができるであろう。

生涯学習社会において学校教育がその機能を十分に果たしているかどうか、それを診断する基準は、学校教育が生涯にわたって学習し続けるに必要な基礎的基本的能力を育成しているかどうかということである。基礎的基本的能力を中教審『教育内容等小委員会審議経過報告書』<sup>(1)</sup>にならって、自己教育力と言いかえるなら、自己教育力を育成しているかどうかが、学校教育診断のチェックポイントと言うことになろう。

## 2. 自己教育力の構造と育成要件

### (1) 自己教育力の構造

生涯学習社会において生きていかなければならない人間にとって、最も必要な基礎的基本的能力は、自己教育力であるので、生涯学習社会における学校教育の役割、いいかえれば生涯学習体系の一環としての学校教育の役割は、自己教育力を育成することである。したがって生涯学習社会において学校教育がうまく機能しているかどうかは、自己教育力を育成しているかどうかによって診断されるべきものである。自己教育力は、学校教育

機能診断のキイ概念であるので、その構成を明確にしておく必要がある。

自己教育力は、河野重男氏によれば、三つの要素から構成されている。一つは、学習意欲である。自己学習しようとする意欲・意志である。これは自己教育力の原動力部分、エネルギー部分を構成するもので、これなくしては、学習活動は発動し得ない。自己教育力にとって必要不可欠の中核部分にあたるものである。

次いでは、学び方という要素である。意欲が旺盛で学習活動をつき動かすエネルギーがあふれているにしても、学び方が分らなければ、学習活動の具体的進展は不可能である。学び方の要素が適切に位置づけられてなければ、自己教育力は成立しない。

第三の要素は生き方である。これは多分に道徳的なおいのする要素であるが、生涯学習社会における人間の生き方として不可欠のものであるとされる。自分が学んだものを仲間に教え、仲間が学んだものを教えてもらう。自分が高まると同時に仲間も高まる。自他共に高まり合う生き方が、自己教育力の必要不可欠の要素であると言う。

自己教育力とは、以上説明したような学習意欲、学び方、生き方の三要素から構成された人間能力のことである。この能力が生涯学習社会に生きる人間の基礎的基本的能力であり、この能力を育成することが、生涯学習体系の一環としての学校教育の主要な役割だというのである。

## (2) 学習意欲が自発する要件

それでは次にこのような意味での自己教育力育成のためには、どのような条件が学校教育の中に必要なであろうか。自己教育力育成のための必須の要件をさぐってみたい。

まず学習意欲の要素から検討してみたい。子どもの学習意欲が旺盛になり学習活動が活性化するためには、学校教育には、どのような要件が必要であろうか。学習意欲が自発するための学校教育の要件と言ってもよい。

まず第一は、学校の課する課業が、子どもの主体の要件にマッチしていることである。子どもの問題意識にマッチした問題が課題として提供され

ているかどうかである。子どもは自分の興味関心を持った課題には自発的主体的に取り組んでいく。そして問題解決することができれば、それによって知的には客観的世界を拡大していき、情緒的には自己拡大感を持つことができる。一時間の授業毎に自己拡大感を持つことができれば、それが次の問題への興味関心を起させ、学習意欲を自発させていくのである。

札幌市立向陵中学校では、すでに昭和47年から『現場で取り組む教育課題の改造』<sup>(4)</sup>というテーマで、この問題に取り組んでいる。向陵中学校では、現代の中学生は、受け身、無気力、無関心で、学習意欲がとぼしく、意欲的に勉強しないと捉える。もちろん現代社会における青少年の一般的な傾向であり、社会に起因する側面もある。しかし向陵中学校では、その責任の一端は、中学校の教育体制にもあるのではないかと捉える。中学校がそんな子どもを育てているのではないか、と自己分析するのである。

積極的意欲的に学習に取り組む子どもを育てるには、学校教育のあり方をどう改めるべきか、教師集団全員で取り組んでいくのである。

向陵中学校では、各教科の教材を二つのタイプに分ける。B型教材とA型教材である。B型教材は、基礎的基本的な教材であり、教師が子どもたちに教え込む教材である。A型教材は、生徒の学習活動を前面に押し出すやり方のできる教材である。

向陵中学では全教官が自分の担当する教科について、教科のどの部分がA型に向いているか、あるいはB型に向いているかを検討し、A型教材の場合は、子どもの主体的な学習活動を前面に押し出した授業を展開し、主体的学習活動を通して、子どもの学習意欲の育成を意図したのである。

子どもの問題意識にマッチするように課題を提供し、子どもの自主的主体的学習活動を活性化する。それによって子どもが自己拡大感を持つ。こうして学習意欲を自発させる。向陵中学校の『現場で取り組む教育課程の改造』は、21世紀に生きる人間、生涯学習社会に生きる人間の育成を目指した教育の試みであると言えるであろう。

学習意欲・学習意志を旺盛にするためには、学習課題を子どもの問題意

識にマッチさせる努力と同時に、教師が子どもを受容するという人間関係の樹立も必要である。学習意欲が自発するためには、学習内容上の条件と同時に子どもが学習活動する場合の人間関係上の条件も必要なのである。

教師が一人ひとりの子どもに関与し、受け入れていくという条件である。教科や教科外の授業の時だけではなく、学校における生活のすべての領域において、教師は子どもを受け入れていく。子どもが教師から受け入れられているという被包感を持つことが学習意欲自発の必須条件なのである。

子どもは重要他者としての教師から受け入れられているという意識を持つ時、学校において情緒的に安定し、生活意欲と共に学習意欲が自然発生してくるのである。

教師からだけなく<sup>(5)</sup>、学校の仲間からも受け入れられているという意識を持つことができれば、学習意欲は一層自発してくる。したがって生涯学習社会に生きる人間に必要な自己教育力、その中でもとくに学習意欲を高めていくためには、学校には、子どもを受容的雰囲気で包むという条件が必要である。受容的風土を創生する学校経営を必要とするのである。

### (3) 学習の仕方を育成する条件

次に自己教育力の第二の要素である学び方の問題を検討してみよう。生涯学習体系の一環としての学校教育は、一人ひとりの子どもに学習の仕方を身につけさせねばならない。だが学習の仕方を辞典の引き方、データの利用法、図書館の利用法といった技術的な問題として狭く解釈してはならない。それらは学習の仕方を一面的表面的にしか、捉えていない。学習の仕方の問題は、人間の能力の問題として捉えていく必要がある。そしてそれは聞く能力と言ってよい。つまり学習の仕方の基礎的基本的能力として他人の話を「聞く能力」をまずあげておきたい。

聞く能力とは、相手の話を聞く能力である。相手の話を聞くことができるためには、相手に対して心を開いていなければならぬ。open-mindedness、Ohenfeit の心的態度が必要なのである。相手に対して心を開くには、相手から受け入れられ、また相手を受け入れていなければならぬ

い。相互受容的人間関係においてはじめて、相手に対して心を開くことができ、相手の話に耳をかたむけることができる所以である。

学習の仕方の基礎基本としての聞く能力を育成するには、どうしたらよいか。学校教育においては、教師はまずは子どもとの間に相互受容関係を築き上げていかなければならない。これが基本的な必須条件である。その上で教師は、実際に子どもたちの心に耳をかたむけ子どもたちの話をすることを聞いてやらなければならない。実際に教師が子どもに耳をかたむけないで、子どもに、聞く能力を育成しようとしても、それはシシポスの試みにすぎない。よく聞いてもらった体験のある子どもだけが、聞くことができるようになるのである。

学校現場では、『個を生かす学習』をテーマとした研究や実践が多数試みられている。一人ひとりの子どもの個別性に着目した教育を推進しようと言うことであり、それは一人ひとりの子どもの声に耳をかたむけようとする試みでもある。

しかし実際はどのように実践されているか。子どもの側から教師の予想しなかった意外性を持った、しかし客観的に考えれば独創性を持った質問が出たとする。だが多くの場合教師は、その質問を取り上げない。指導案にない意外性を持った質問なので、「その質問は、的はずれだから、あとで職員室へ来なさい。教えてあげる。」ですますのである。子どもの方は、「チエッ」と明らかに反発と学習意欲をなくした態度を示している。この質問をなぜ授業の中で取り上げ、じっくりと集団で考えさせないのであろうか。そうすれば授業は一層十実したものになるのに。

教師は、子どもの声に耳をかたむけることができないでいる。その結果子どもの独創的な考え方を少しも学ぶことができないのである。

またそのような教師にかぎって、じっくりと子どもに語って聞かせること言うことがない。このような教師の下では、子どもの聞く能力は育たないのである。

子どもに聞く能力を身につけさせようと思えば、子どもの話しにじっくり

りと耳をかたむけ、またじっくりと子どもに語りかけてやることが必要な  
のである。

国語科では、読む能力、書く能力、話す能力が強調されている。しかし  
それと一緒に聞く能力も強調していく必要がある。とくに仲間の出している  
独創的な意見に耳をかたむけ、それを学習し自分を高めていく場合には、  
聞く能力は、学習の仕方として決定的に重要なのである。学校教育は、聞  
く能力を育成しているかどうか、生涯学習社会における学校教育機能をチ  
ェックする場合のチェックポイントの一つである。

学習の仕方の学習において、もう一つ留意しておきたいことは、学習の  
仕方においても一人ひとりそれぞれ個性的であり、得意不得意があるので、  
一つの学習の仕方に固執することはできないということである。一人ひと  
りの子どもの個性にあった学習の仕方を、身につけさせる必要がある。学  
習の仕方を子どもの個性に合わせて、多様化、個別化していく必要がある  
のである。

現在学校教育の中でよく見られる学習指導の方法は、主として系統学習  
と問題解決学習である。<sup>(3)</sup>一人ひとりの子どもには、それぞれ思考のパター  
ンがあり、系統学習型の学習に向いている子どももいれば、問題解決型の  
学習に向いている子どももいる。そこで学習指導の方法を子どもにマッチ  
したものにする必要がある。またそのためには指導方法をもっと多様化し  
ていく必要がある。

黒板とチョークを使った数学の授業には、ついていけない子どもでも、  
パソコンの構造を理解し、自由に使用している。またパソコンを利用して  
ハウスの水管理もうまくやっている。系統学習型の学習の仕方は不得意だ  
が、体験学習型の学び方は得意なのである。子どもの適性に合った学び方  
を修得させていく必要があるのである。

とくに現在の学校教育では、系統学習の立場による一斉教授方式の授業  
型態が非常に多い。この授業型態についていけない子どももまた非常に多  
い。系統学習型の学び方の不得意な子どもである。このような状況の中で

は、とくに問題解決学習型の授業や体験学習型の授業を多くしていく必要がある。系統学習型の授業でおちこぼれた子どもの中にも、問題解決学習型の学び方や体験学習型の学び方の得意な子どもがいるので、そのような授業の中で救われる所以である。またそうすることによって、自分に適した学習の仕方を一層身につけていくことにもなる。

#### (4) 生き方の学習条件

自己教育力の第三の要素としての生き方の問題に移る。自他共に高まり合う生き方を育成するためには、学校教育には、どのような条件が必要なのか。

それに入る前に生き方が、なぜ自己教育力の構成要素に入っているのかを検討してみる必要がある。人間としての生き方を探求することは、すぐれて道徳教育的な問題である。分らない子どもが隣りに座っていても知らんふりをする。これは生涯学習社会における人間としての生き方に反する。分らない子どもがいれば、助ける。これが人間としての生き方である。学習において、仲間の学習に協力し援助する。また自分の学習したことを仲間に分ち与える。仲間と共に高まり合う生き方、これが生涯学習社会における人間としての生き方である。生涯学習社会では、このような生き方が要求されているのである。したがってこのような人間的生き方を、もはや自己指導力、自己管理能力、問題解決能力とか言うことはできない。すぐれて道徳的な生き方をふくみ持っているという意味で自己を教育する能力、自己教育力とでも表現しなければならないだろう。かくして生き方は、自己教育力の重要な構成要素の一つとなるのである。

さてこのような自他共に高まり合う生き方は、どのようにして育成されるのか。自他共に高まり合う生き方は、まず相手の立場に立って考えることができなければならない。相手を思いやる心が必要である。相手の立場に立って考える能力、相手を思いやる能力は、どうすれば育成できるか。学校教育の中で、教師が一人ひとりの子どもを受容し、さらに教師が一人ひとりの子どもの立場に立って考え、一人ひとりの子どもを思いやる心を

持つことである。

子どもは、自分を受け入れてくれる教師が、自分が愛し尊敬する教師が、一人ひとりの子どもの立場に立って考え、一人ひとりの子どもを思いやる姿を見る。自分が尊敬している人物の行動や態度は、子どもに素直に受け入れられ、子どもはそれを内面化して、自分自身の行動や態度とする。子どもが、他の子どもに対して、相手の立場に立って考え、相手を思いやるようになるのである。教師を愛し尊敬していればいるほど、この内面化の学習は、ラディカルにしかも急速におこなわれる。

小学校二年生のあるクラスの算数の授業である。 $\frac{1}{2}$ とか $\frac{1}{3}$ という分数を学習する時間である。教師が一枚の紙を子どもたちに示し、「これを一とします。」と言う。それを半分に折って、「これを算数の言葉で何と言いますか？」と尋ねる。多くの子どもたちの手があがる。その中に平素あまり算数のできない吉川という子どもの手が上がっている。そこで教師は、「吉川君」と指名する。吉川君は、立ち上って、「5」と答える。教師は、吉川君の「5」と答えた意味がよく分からぬ。そこで「なぜ？」と尋ねる。ところが吉川君は「5」「5」とおうむがえしに答えるだけで、説明しない。教師は困って首をかしげながら、どんな意味で「5」と答えたのか、一生懸命に考える。だが分らない。するとそれを見ていた田所君が立ち上って、次のように発言する。「先生、ぼく、吉川君の「5」という意味が分るような気がする。この前先生は、1 l の半分は、5 dl と教えてくれただろう。だから吉川君の言う「5」のうしろに、なにか言葉を入れればいいんだ。」するとそう一人の子どもが、「そうだ。1 cm の半分は、5 mm だもの。」と言う。

ここで注目してほしいのは、田所君の発言である。田所君は、吉川君が「5」と答え、教師が「なぜ」と尋ねて以来、吉川君の立場に立って、その意味を一生懸命に考えているのである。そして1 l の半分は5 dl と学んだことを思い出し、吉川君の「5」は、5 dl の「5」に対応しているんだと思いついたのである。吉川君を思いやり、吉川君の立場に立って一生懸

命に考えてたから、考えついたのである。

普通の教室であれば、教師が首をかしげた段階から、「ハイ」「ハイ」「ハイ」と指名争いが起る。吉川君は、自分の答えはまちがいだと知り、机に座わり、下を向いて、もう二度と挙手をすることもなく萎縮してしまう。このようなことが繰返されると、遂にはおちこぼれになってしまうのである。だからこの教室では、子どもたちは相手の立場に立って考え、相手を思いやる心を持っている。したがって自他共に高まり合うことができたのである。自己教育力の構成要素としての生き方とは、この授業の中の子どもたちのような生き方である。このような教育が学校教育の中でおこなわれているかどうかが、生き方育成をチェックするチェックポイントとなる。

### 3. 生涯学習社会における学校教育の要件

学校教育の中核は、なんと言っても教育内容と教育方法の問題である。教師にとってはどんな教育内容をどんな方法で教えているか、子どもにとってはどんな内容をどんな方法で学習しているかの問題である。内容と方法に関する学校の営みが、学校教育の質を決定的に規定してしまうのである。生涯学習体系の一環としての学校教育が、その機能を十分に果たしているかどうか、チェックするチェックポイントも、まず内容と方法の問題を取り上げるのが一番であろう。

生涯学習社会における学校教育の要件としては、なによりも、子どもたちの自発的主体的学習活動を重視することである。子どもたちが自発的主体的に学習活動に取り組んではじめて、その過程であるいはその結果として自己教育力が育成されてくるのである。自発的主体的学習活動が重視され実践されているかどうか、がまずチェックポイントとならなければならない。

次には、自発的主体的学習活動がおこなわれるための条件整備が、内容、方法、人間関係のレベルで配慮され実施されているかどうかが検討されね

ばならない。自発的主体的学習活動が自己教育力の育成にとって必要だからと言っても、それが現実に実践されるように配慮され具体化されてなければ、主張されるだけであり、熱意と意図のほども疑わなければならない。

自発的主体的学習活動を現実化するためには、教育内容においては、子どもの問題意識にマッチした内容であることが必要であり、また指導方法においては、一斉教授方式で知識や技術を一方的に伝達していくというやり方よりは、子どもが身体をふくめた各人格をもって没入参加できるような体験学習型の方法が必要である。子どもの間には、もちろん系統学習型の学習の仕方の得意なものもいるが、発達段階からして、大部分の子どもは身体を使用した体験学習型の学習の仕方を好むのであるし、また得意とする。したがって教科の授業でも、体験学習可能な教材は、できるだけ体験学習型の授業展開をしていく必要がある。

もちろん体験学習型の学習指導を奨励するからと言って、系統学習型の指導法を全く排除しようとするものではない。教科の基礎・基本を子どもたちに定着させるためには、教科の論理に即した教え込みも必要な場合もある。そしてとくに道具的教科の基礎・基本が不確実であると、それ以後の学習もできなくなる。字が読めなくて、なんで生涯学習ができるであろうか。生涯学習を続けていくためにも、とくに道具教科の基礎・基本は確実に定着させておかなければならない。そのためには系統学習型の指導が必要である。

だが問題解決学習型の指導や体験学習型の指導ができる教育内容の場合は、ぜひ問題解決学習型、体験学習型の指導を試みる必要がある。身体をふくめた全人格を動員することができ、自発的主体的学習が可能となるからである。

このことは、教育内容や教育方法を、子どもの個性を配慮しながら展開しようと言ふことでもある。教育内容や方法を、できるだけ子どもの特性に適合するように個別化・個性化していくことが、子どもの自発的主体的学習活動を誘発することになり、自己教育力の育成に一層寄与する条件づ

くりにもなるからである。

教育の内容と方法を、子どもの主体の側の条件に適合したものに個性化・個別化して、子どもの自発的主体的学習活動を実現する試みは、特別活動の領域では一層重視されなければならない。特別活動の中のクラブ活動は、教育内容と方法を徹底的に個別化、個性化して、子どもの個性や特性の伸長をねらいとしたものであり、自発的主体的学習活動として展開されることを本旨とするものである。

また学級活動や児童・生徒会活動にしても、学級・学校生活をよりよきものに改善していく自発的主体的な集団活動であり、またそれは身体を動かしての体験的実践的活動でもあるので、この活動の場合は、自己教育力の中のとくに生き方の指導の問題と深いかかわり合いがある。学級活動や児童・生徒会活動に積極的に参加し、集団に対してサービスしたりサービスされたりすることによって、自他共に高まり合う生き方を身につけることができるのである。

このことは、学校行事への参加についても同じように言える。学校の一員として学校行事の実施に積極的に参加することを通して、集団を高めると同時に個を高めることを体験的に学び取っていくことができるのである。

また特別活動は、問題解決学習型、体験学習型の学習の仕方なので、教科の系統学習型の学習の仕方の不得意な子どもにも、自発的学習活動の機会を提供することができ、生涯学習社会に生きる人間に必要な自己教育力の育成を保証するのである。

子どもたちの自発的主体的学習活動を可能とする要件を、教育内容と方法の領域で検討してきたのであるが、このことはさきにも述べたように、教育を個別化、個性化することである。

だが教育を個別化、個性化して、いかに自発的主体的学習活動の条件を整えたとしても、それだけでは学習活動の展開は、難かしてのである。それは、生活意欲に裏うちされた学習意欲を自然発生させることができ、教育内容と方法の改善だけでは、極めて困難であるからである。学習意欲のよう

に感情・意欲の領域の問題は、感情・意欲の領域の改善を持たねばならない。端的に言えば、学級学校の中に受容的風土を醸成することである。学級や学校の中で一人ひとりの子どもが重要他者である教師から関与され、受容されているという意識を持つことが、学習意欲自発の源泉なのである。このことをぬきにして内容や方法の領域で自発的学习活動の条件をいかに整えても、それは不可能なことである。内容・方法的条件のすべて整っていると言える特別活動でも、自発的学习活動の展開をみないのは、そのような受容的風土が学校や学級の中に存在しないからである。このような視点から生涯学習体系の一環としての学校教育にとって、学級経営や学校経営が、重要な問題点として浮び上ってくるのである。学校経営が、教師一子ども関係、子ども相互関係、教師相互関係、校長教師関係における受容の醸成を目指して実践されているかどうかという問題である。

学校経営において今一つ重要な問題は、教師が平素の生活において常に自己教育をしているかどうか、自発的な研修に励んでいるかどうかの問題である。子どもにとって、自己教育の育成モデルのないところでは、自己教育力も育成されない。学校経営においては、教師の一人ひとりが常に研修に励むことのできる条件整備が必要であるか、その条件の重要な一つに、校長の教師に対する受容の問題があることを忘れてはならない。

最後に学校が地域社会に対して開かれており、また地域社会も学校に対して開かれている必要がある。体験学習では、地域に出かけ、また地域の人たちの参加を必要とするであろう。また地域の人たちが学校へ来て学習している姿を、子どもたちが観察することは、生涯学習のよきモデルとなる。とくに地域の人たちと子どもとの間に相互受容関係の成立しているところでは、子どもは、自分を受け入れてくれ、尊敬している地域の人たちをモデルとした社会的学習を盛んにおこなうのである。

### 参考文献

- (1)中央教育審議会『教育内容等小委員会審議経過報告書』昭和59年
- (2)河野重男編『小学校自己教育力育成の手引』昭和60年 明治図書 9頁—18頁
- (3)河野重男「基礎・基本を押え個性を生かす学校・学級経営」永岡順編『新教育課程と学校・学級経営』永岡順編『新教育課程と学校・学級経営』平成元年 図書文化
- (4)河野重男編『自己教育力を育てる（学校改善実践全集3）』 昭和62年 ぎょうせい 293頁—312頁
- (5) C. R. Rogers, The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. J. Consult. Psycho., 1957, 21, 95-103 「ロジャーズ全集第4巻サイコセラピイの過程」1973年 岩崎学術出版社 119頁—120頁
- (6) T. Gordon, Group centered leadership and administration in C. R. Rogers, Client-Centered Therapy, 1951, Mifflin 「ロジャーズ全集第7巻ブレイグループセラピイ・集團管理」1973年 岩崎学術出版社 201頁—202頁
- (7)生涯学習論の立場から、学校教育を論じた文献は、そう多くはない。真野宮雄「生涯教育の基礎としての学校論」日本生涯教育学会編『生涯教育体系の構想（日本生涯教育学会年報 第2号）』1981年 ぎょうせい、角替弘志「生涯教育と学校教育」日本生涯教育学会編『生涯教育と社会教育（日本生涯教育学会年報 第4号）』1983年 ぎょうせい、辻功「生涯教育からみた学校教育の課題」岡本包治・山本恒夫編『生涯教育とは何か（生涯教育対策実践シリーズI）』昭和60年 ぎょうせい、新井郁男「学習社会論（教育学大全集8）」昭和57年 第一法規、市川昭午『改訂生涯教育の理論と構造』1985年 教育開発研究所などは、生涯学習社会における学校教育のあり方を論じた数少ない基本文献である。